

古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換^{*)}

Réorganisations de structures linguistiques
relevées entre l'ancien français et le français moderne

今田良信

IMADA Yoshinobu

0. 「言語構造の変換」について

まず、「言語構造の変換」という用語について説明しておきたい。すなわち、同一言語内にあると見なされうる2つの共時態（体系）間において、時間的に先行する体系（本稿では古フランス語）内の文法範疇や文法現象を構成する諸項目どうしの価値、分布、範疇化などの枠組みが、後続の体系（本稿では現代フランス語）内のその枠組みと比べて、何らかの組み換えが行われていると判断される場合にこう呼ぶことにする。

1. 研究の背景と本稿の目的

筆者は、この「言語構造の変換」を「歴史言語類型論」とでも呼ぶべき枠組みの中で考えているのであるが、後者も前者と同様に筆者の造語であり、本来は共時的研究の枠組みである言語類型論に、時の経過に伴う言語変化の様相をも加え、通時的視点を融合させた新しい言語分析の枠組みの構想である。基準（パラメーター）となる文法範疇や文法現象等について、同一言語内の2つの共時態（体系）間の変化の様相を観察し、その結果を2つ（以上）の言語間で比べてみれば興味深いのではないかとに着想から出発したものである。さらに、その言語変化や、言語変化の中でも特に、本稿で扱うような「言語構造の変換」の型（タイプ）によって諸言語を類型化することはできないかとも考えている¹⁾。

そこで、手始めに、今田(2009)では、フランス語をモデルとして、同一言語内のかなり時間的隔たりを持った2つの体系（具体的には、古フランス語と現代フランス語）間で、予め数を定めた²⁾文法範疇や文法現象のうち、どのパラメーターに、どのような枠組みの変化が見られるのか、あるいは見られないのか、また、見られるとすれば、それはどのようなタイプの、どの程度の開きを持った変化であるのかを調べてみた。

次に、今田(2010a)では、今田(2009)で何らかの変化が見られるのではないかと判断したパラメーターについて、その変化が、パラメーターとなる文法範疇や文法現象全体として、フランス語の2つの体系間で、言語構造上の組み換え（＝変換）と呼ぶことができるものであるのかどうかを検討してみた。また、今田(2010b)として纏めた論考も、両体系

間において、疑問文に関し、全体疑問であれ部分疑問であれ、語順の面でのVSからVS・SVへの分化と文体・言語使用レベルの面での書きことば・話しことばの形式的分化とが、うまく重なって一つに収斂するという構造上の変換が起こったことを検証しようとしたものであった（詳しくは、本稿2. 3. を参照のこと）。

本稿は、今田(2010a)で挙げた事例を、さらに吟味・検証を行って取捨し、事例の図式化の仕方にも新たな統一を図ったものである。

2. 言語構造の変換の具体的事例について

2. 1. 指示（形容～代名）詞構造の変換

〔表1〕は、古フランス語の指示

（形容～代名）詞を示している（略号は、それぞれ、*m*：男性、*f*：女性、*sg*：単数、*pl*：複数、*cs*：主格、*cr*：被制格）³⁾。Raynaud de Lage (1975), p.62によれば、「古フランス語では形容詞の形と代名詞の形は区別されない。〔中略〕その古い区別（一・二人称／三人称、「近さ」／「遠さ」〔筆者補足〕）は、この形容詞か代名詞かという新たな区分によって弱められ、徐々に消失していった。」と述べられている。

さらに、指示詞の語形と品詞機能との結びつきの傾向に関しては、同

所に「元々、*cist*を形容詞として好む傾向や*cil*を代名詞として好むより明瞭な傾向が在りはしたが、13世紀にはなお、*cil*や*cele*が形容詞として用いられ、*cist*や*ceste*が稀にはあるが代名詞として用いられた。」と指摘されている。事例をいくつか挙げてみたい（略号は、それぞれ、近：近称、遠：遠称、形：形容詞的用法、代：代名詞的用法、M.A.: *La Mort le roi Artu, Q.G.: La Queste del saint Graal*, 現訳：現代フランス語訳）。

〔表1〕《古フランス語》指示（形容～代名）詞

		<i>m</i>		<i>f</i>	
		近 称	遠 称	近 称	遠 称
<i>sg</i>	<i>cs</i>	<i>cist</i>	<i>cil</i>	<i>ceste</i>	<i>cele</i>
	<i>cr</i>	<i>ce(s)t</i>	<i>celui</i>		
<i>pl</i>	<i>cs</i>	<i>cist</i>	<i>cil</i>	<i>ces</i>	<i>celes</i>
	<i>cr</i>	<i>ces</i>	<i>ceus</i>		

(1) 〔近・形 *f/sg/cr*〕 *en ceste queste*[M.A.2/14] 「この探索の間に」

cf. 〔現訳〕 *au cours de cette quête*

- (2) [近・代 *f/sg/cr*] *plaie* … dont vos plus vos repentissiez que vos feroiz de *ceste* ; [M.A.24/33] 「汝がそれ (=その傷) を負わせて後悔するよりももっと後悔したであろう傷」 cf. [現訳] *blessure* dont vous dussiez vous repentir plus que de *celle-là*
- (3) [遠・形 *m/sg/cr*] *Celui* jor [M.A.13/1] 「その日」 cf. [現訳] *Ce jour-là*
- (4) [遠・代 *m/sg/cr*] De *celui* issi li rois Bans tes peres, [Q.G.136/18] 「あの者から汝の父親バン王が生まれ」 cf. [現訳] De *lui* naquit le roi Ban ton pere

例えば、(1) は、近称の指示詞の形容詞的用法で、語形が女性・単数・被制格の事例である。これに対し、(2) の方は、(1) と同一の語形であるが代名詞的用法である。従って、対応する現代フランス語訳を見ると、(1) では *cette* と指示形容詞になっているのに対して、(2) では *celle-là* と指示代名詞になっていることが分かる。また、(3) と(4) の用法も比べてみられたい。ここでは、遠称の指示詞について2つの用法の違いが見られる。

次に、[表2] に現代フランス語の指示形容詞を、[表3] に現代フランス語の指示代名詞を示す表を挙げた。[表1] を含めた3つの表から見る限り、現代フランス語の指示詞には語形による形容詞と代名詞の区別があるわけであるが、古フランス語ではその違いは未分化であることが分かる。一方、古フランス語には、空間や時間における「近さ」と「遠さ」、或いは一・二人称(対話)と三人称(叙述)という違いを表わす近称と遠称という、現代語には無い指示詞の語形による区別が見られるが、両体系の各語形から判断すれば、この古い機能上の対立は、形容詞か代名詞かという新たな機能上の対立に組み換えられていることが見て取れよう。

[表2] 《現代フランス語》指示形容詞

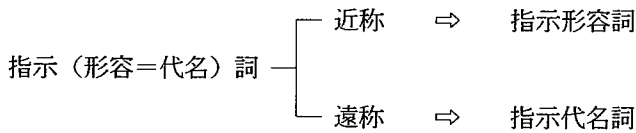
	<i>m</i>	<i>f</i>
<i>sg</i>	<i>ce(cet)</i>	<i>cette</i>
<i>pl</i>	<i>ces</i>	

[表3] 《現代フランス語》指示代名詞

	<i>m</i>	<i>f</i>
<i>sg</i>	<i>celui</i>	<i>celle</i>
<i>pl</i>	<i>ceux</i>	<i>celles</i>

そこで、この構造の変換を図式化したものが〔図1〕である。なお、⇒は、言語構造上の新たな発展を表わす（以下の図においても同様）。

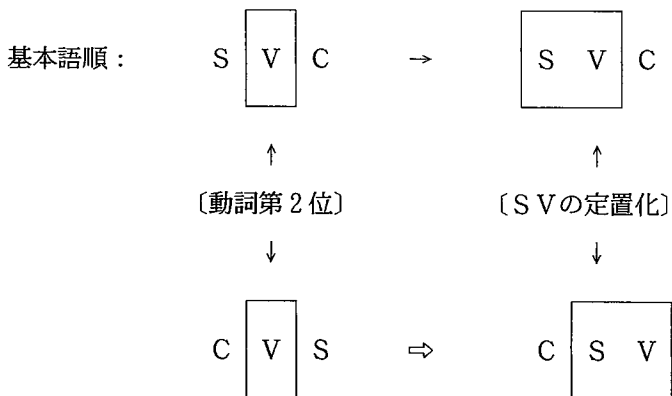
〔図1〕 《古フランス語》 《現代フランス語》



2. 2. 平叙文の語順構造の変換

平叙文の語順のうち、基本語順については古フランス語も現代フランス語もSVCである（略号は、S：主語、V：動詞、C：補語（直接目的～、間接目的～、状況～を含む）。しかし、もう少し細かく見てみると、今田(2002c)、他⁴⁾において既に述べてきたように、両体系における基本語順の価値は、それを取り巻く平叙文の語順全体の状況変化に伴って大きく異なっていることが分かる。すなわち、古フランス語は、「動詞第2位」が原則の語順体系であったのに対し、現代フランス語は、動詞活用語尾の実質的磨滅に代わって接頭辞的機能を担うに至った人称代名詞主語（cf. Vidos(1959), p. 396）も含めて、SVが定置化された語順体系であるという点である。この両語順体系の根本的相違により、SVCという基本語順の価値も必然的に異なることになるので、これも平叙文の語順構造の枠組みの組み換えと考えられよう。この構造の変換を図式化したものが〔図2〕である⁵⁾。

〔図2〕 《古フランス語》 《現代フランス語》



2. 3. 疑問文の構造の変換

〔表4〕は、今田(2010b), p.27 に掲載した、「タイプごとに見た古フランス語と現代フランス語の疑問文」の表における各タイプに、略号化したS, VおよびKによる語順を付け加えたものである(略号は, K:疑問詞)。なお, 表に示されている全体疑問文および部分疑問文の各タイプに対応する具体的事例を表の後に挙げて置いた⁶⁾。

〔表4〕タイプ別に見た古フランス語と現代フランス語の疑問文

	《古フランス語》	《現代フランス語》	語 順	
全 体 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用? →使用(口語)	SV	
	②Est-ce queタイプ	不使用 →使用(口語)	SV	
	③倒置疑問タイプ	使用(原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用(書きことば中心) 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置〕	V S
部 分 疑問文	①平叙疑問タイプ	不使用 →使用(くだけた口語)	SVK	
	②強調疑問タイプ	使用(まれ) →使用(口語)	KSV	
	③倒置疑問タイプ	使用(原則) 〔名詞主語・代名詞主語 ともに単純倒置のみ〕	→使用(書きことば中心) 〔代名詞主語は単純倒置, 名詞主語は複合倒置およ び単純倒置もあり〕	KVS
	④間接疑問タイプ	不使用(基本的に) →使用(くだけた口語)	KSV	

- e. g. 全体疑問文: ① Vous parlez français? SV
 ② Est-ce que vous parlez français? SV
 ③ Parlez-vous français? VS
- 部分疑問文: ① Ton cousin habite où? SVK
 ② Où est-ce que ton cousin habite? KSV
 ③ Où habite ton cousin? KVS
 ④ Où ton cousin habite? KSV

この表を分析すれば、次の点が指摘できよう。

(i) 主語と動詞による語順の違いの面からの分析

通時的に見ると、全体疑問文と部分疑問文の両方において、VSが原則であったと考えられる古フランス語に比べて、現代フランス語は、文頭にせよ、文中にせよ、文尾にせよ、SVを定置化したまま(=倒置せずに)疑問文を作るという傾向を強くしていることが見て取れる。この点は、本稿の2. 2. でも既に指摘したが、平叙文において観察される、「動詞第2位」が原則である古フランス語の語順体系からSVが定置化されるのが原則となった現代フランス語の語順体系へという、両語順体系間の根本的枠組みの変換とも矛盾無く合致していると言える。

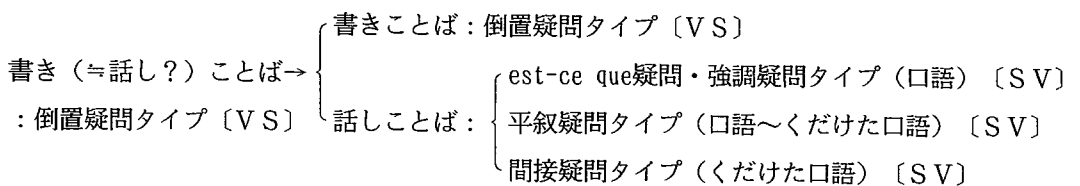
(ii) 文体や言語使用レベルの違いの面からの分析

古フランス語においては、文法書等の記述の範囲で見ると、倒置疑問タイプが原則で、それ以外のタイプはほとんど未発達であり、結果として、話しことばと書きことばの両者が形式的に未分化であるように見える。一方、現代フランス語に至るまでに、倒置疑問タイプの他に3つの新しいタイプが発達してきたが、そのことが、話しことばと書きことばの間に形式的な分化の傾向を生み出し、書きことばは倒置疑問(=VS)タイプ、話しことばはそれ以外の(=SV)タイプ(est-ce que疑問・強調疑問タイプ、平叙疑問タイプ、間接疑問タイプ)というような、タイプによる役割分担が生じてきているという状況が見られる。

以上をまとめて図示すれば、〔図3〕の通りである。

〔図3〕 《古フランス語》

《現代フランス語》

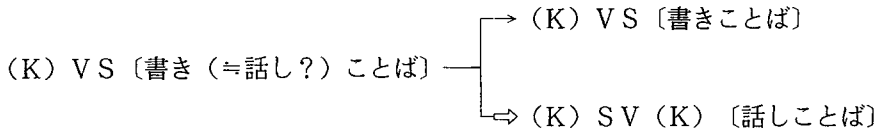


さらに、最終的に、(i)と(ii)を統合して、全体疑問も部分疑問も区別せず、SとVの語順、疑問詞(K)の位置、話しことばと書きことばの区別のみを単純化して、フランス語における疑問文の構造の変換を図式化すれば、〔図4〕のように図示できよう。なお、()は、疑問詞について、有無(=部分疑問か全体疑問か)の選択、および二者間(= (K)SV(K)の2つのK)の択一(文頭に来るか文末に来るか)を示す。

〔図4〕

《古フランス語》

《現代フランス語》



この図によって筆者が指摘したい最も重要な点を端的に言うならば、古フランス語と現代フランス語の間に生じた疑問文の構造上の変換とは、1. でも触れたように、全体疑問にせよ部分疑問にせよ、語順についてはVSからVS・SVへの分化が、また文体・言語使用レベルについては書きことばと話しことばの形式的分化が起こり、この2つの分化が重なって一体化したということである。

3. その他詳細の検討を要する事例について

以上の他に、更なる詳細の検討を要するが、言語構造の変換の事例として考えられ得るものとして、(a)付加形容詞と名詞の語順構造の変換、(b)主語(人称)代名詞の省略/非省略の構造の変換、(c)文法範疇としての格構造の変換、(d)冠詞構造の変換、などが挙げられる。これらについては、今後検討することにしたいが、(a)については、2. 2. の平叙文の語順構造の変換、および2. 3. の疑問文の構造の変換と共に、フランス語における語順構造シフト、取り分け語順類型論的観点から見たシフトの通時的方向性の問題として、次稿以降で有機的に関連して来るので、少し触れて置きたい。

すなわち、古フランス語については、Raynaud de Lage(1975), p. 39 によれば、「この(文中での形容詞の)位置は、属詞形容詞についてでさえ、古フランス語においては、極めて自由であった。それにもかかわらず、付加形容詞は非常に一般的に名詞に先行した。」とある。一方、現代語については、佐藤、他(1991), p. 95に「(現代)フランス語では、〔中略〕形容詞の原則的位置は名詞の後である。」と述べられている。これを図式化すれば、〔図5〕のように示すことができよう(略号は、A:形容詞, N:名詞)。

〔図5〕

《古フランス語》

《現代フランス語》

AN ⇨ NA

この構造の変換は、一般的な語順類型論における主要語順パラメーターの構成要素どう

しの関係で言えば、「OV型」（「従属部－主要部（dependent-head）型」）から「VO型」（「主要部－従属部（head-dependent）型」）へのパラメーター値のシフトの事例と見ることができる。その場合、このパラメーターだけでなく、節内基本語順を始めとした他の各主要語順パラメーターにも考察を広げ、それらと有機的に関連するものとして語順構造シフトの通時的方向性を考えることもできよう。

4. まとめと今後の展望

以上、古フランス語と現代フランス語の間の言語構造上の変換の事例をいくつか提示してきた。今後は、この実証的データに基づいた事例について、パラメーターとなる各文法範疇や文法現象間で有機的に関連があると考えられるものについて、1つの枠組みに纏めた上で、その構造全体の通時的シフトの方向性やその背後で働いていると考えられるメカニズムを明らかにすることを目指している。また、各文法範疇や文法現象における言語変化および言語構造の変換の型（タイプ）による、他の諸言語との類型化に関しても、今後の課題である。そして、先行研究の中での、本研究で得られた結果の位置づけなどについても、次稿以降、もう少し考察を進めてから言及したいと考えている。

注

- *)本稿は、日本ロマンス語学会第49回大会（神戸市外国語大学，2011年6月4日）における口頭発表をもとに、修正・加筆を施したものである。
- 1)この点については、また次の段階の考察に譲りたい。
 - 2)安藤(1987)では、23項目の基準について、必ずしも全てについてというわけではないが、英語と「共時的」に対照させた日本語の「特質」が挙げられている。また、古浦(2008)では、安藤の基準に1つ追加した24項目の基準について、日本語・イタリア語それぞれの「特色」が挙げられている。今田(2009)では、それにさらにもう1つ25番目の基準を加えて、古フランス語と現代フランス語との「通時的」な対照を行っている。
 - 3)この表は、Raynaud de Lage(1975), p. 61 に掲載されているものを簡略化し、説明に必要な語形のみを挙げて「近称」と「遠称」の区別を示したもので、各桁目の語形には、もちろんそれぞれ異形(variante)が存在する。
 - 4)今田(1993), (1995), (1996), Imada(1997), 今田(1998), (2001), (2002a), (2002b)という一連の論考を参照のこと。
 - 5)古フランス語(AF)および現代フランス語(FM)における事例としては、SVCについては、AF(=MF): Il viendra peut-être. 「彼は来るかも知れない。」〔以下、いずれの

語順の場合も概念的意味は同様]を、古語のCVSについては、AF: Peut-être viendra il. (現代語と異なり、語調のtは挿入されない)を、現代語のCSVについては、MF: Peut-être il viendra. を挙げることができよう。なお、現代語でも、CVSのMF: Peut-être viendra-t-il. は全く不使用ではないが、Roberge, 他(2002), p. 880 によれば、「これは凝った文体であって、ごく稀にしか用いられない。」と指摘されている。しかも、現代語の話しことばでは、Peut-être qu'il viendra. のように、わざわざ que を挿入してまでSVを保持しようとする傾向も見られる。

6) 詳しくは、今田(2010b), pp. 22-24 を参照されたい。同所には、ここでは省略したが、各疑問文の抑揚に関しても指摘がなされている。なお、全体疑問文の事例の概念的意味はいずれも「あなたはフランス語を話せますか。」、部分疑問文の方はいずれも「君のいとこはどこに住んでるの。」である。

参考資料

La Mort le roi Artu, Roman du XIII^e siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris: Droz/Minard, 1964. [現代語訳: *La mort du roi Arthur*, traduit par M. Santucci, Paris: Honoré Champion, 1991.]

La Queste del saint Graal, Roman du XIII^e siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980. [現代語訳: *La Queste du Saint Graal*, traduite par E. Baumgartner, Paris: Honoré Champion, 1979.]

参考文献

安藤貞雄(1987): 『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 — 』, 大修館書店.

今田良信(1993): 「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — CVS語順対CSV語順を基準として — 」, 『ニダバ』, 22, pp. 80-91.

今田良信(1995): 「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」, 『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, pp. 31-45.

今田良信(1996): 「古フランス語における文頭の補語と語順」, 『ロマンス語研究』, 29, pp. 68-82.

今田良信(1998): 「古フランス語における文の肯定/否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語(句)とCVS/CSV語順との関係について — 」, 『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書, pp. 205-210.

今田良信(2002c): 『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の

- 体系と変化 — 』, 溪水社.
- 今田良信(2009): 「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a): 「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から — 」, 『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b): 「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」, 『ロマンス語研究』, 43, pp.21-30.
- 古浦敏生(2008): 『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- 佐藤房吉, 他(1991): 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 島岡茂(1982): 『古フランス語文法』, 大学書林.
- Roberge, Claude, Solange内藤, Fabienne Guillemin, 加藤雅郁, 小林正巳, 中村典子 (2002): 『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 — 』, 駿河台出版社.
- Buridant, Cl. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Foulet, L. (1980³): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Hasenohr, G. & Raynaud de Lage, G. (1993²): *Introduction à l'ancien français*, Paris, SEDES.
- Imada Yoshinobu(1997): La distinction affirmation/négation dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV — , *Studia Romanica*, 30, pp.9-16.
- Lyons, John(1968): *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Bière.
- Raynaud de Lage, G. (1975): *Introduction à l'ancien français*, 9^e éd. revue et corrigée, Paris: SEDES. [大高順雄訳編『古フランス語入門』, 朝日出版社, 1981]
- Vidos, B. E. (1959): *Manuale di linguistica romanza*, Firenze, Leo S. Olschki.
- Wartburg, W. von(1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2^e éd., Bern: Francke Berne.
- Yaguello, M. (2003): *Le grand livre de la langue française*, Paris, SEUIL, pp.11-90. (Marchello-Nizia, Ch.: Le français dans l'histoire)